



竹林 真悟
小さくて大きな思い 1

田坂亜紀子

花嫁のれん 11

月江 教昭

ミトコンドリアといのち 21

深川 宣暢

「西」をおもつ 31

本文中、『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』は『註釈版聖典』、『浄土真宗聖典（七祖篇）註釈版』は『註釈版聖典（七祖篇）』と略記しております。

表紙絵・挿絵／土田 菜摘

小さくて大きな思い

竹林真悟

電車のなかで

ここ数年、電車を利用する機会が増え、季節や時間帯によって車内の雰囲気が変わることに気づきました。春には、通勤通学の時間帯並みに混雑する休日の朝があります。多くの乗客のお目当ては、そう、桜です。地域によって色づきの度合いが異なる紅葉の季節とはちがって、いつせいに開花する桜は満開の週末を逃すと翌週には見られないからでしょう。みな歩きやすそうな靴、帽子、肩にはリュックに飲み物を下げた人は

かり。顔にはどこかワクワク感が漂って、混んでいるにもかかわらず車内の雰囲気はほんわかしています。

私は思わず心の中で、「今年もこの季節が巡ってきたか」とつぶやきます。車外に目をやると、沿線に植えられた満開の桜が、時折、車窓を駆け抜けていきます。

桜とふたりの父

「退院したら、また家族で桜、見に行こう」

果たすことのできない約束だと知りながら、末期がんの父を励ますつもりで絞り出した言葉です。その時はすでに寝返りをうつ体力もなく、結局、その年の桜を見ることがなかった父は、「うん」と頷いてくれました。

気の利いたことを言えたつもりの私でしたが、葬儀を終えて、もう会えないと実感してからは、「うん」と頷いてくれたのが父の優しさだったのだと思うようになりました。その優しさに気づけなかったことが申し訳なく、一周忌を迎える頃には、謝罪の言葉で心が埋め尽くされています。

「父の心が穏やかになるような言葉は他になかったのだろうか」と、い



まなお自問する日々が続いています。

春は、もう一人の父、義父のことも思い出されます。

義父は、あそかビハーラ病院への入院を希望しました。その病室には、部屋番号がありませんでした。用意された花の絵のカードから利用者が好きなものを選んで、各病室の目印にするのです。

看護師さんが持ってきてくれたたくさんの花の絵から、義父は迷わず桜を選びました。おそらく今年見ることのない桜を選んだのだろうと想像できませんでした。

「そつか。何気なく見送った去年の桜が、義父にとって最後の桜になるかもしれない」という思いが、私の顔に沈痛な表情を作ったのでしょうか。

その時偶然合った視線で、義父が「気にするな」と言ったように感じました。義父の心遣いがとても温かく、そして嬉しく、一方でそんな思いを顔に出してしまったことを悔やみました。

いたるところで街を染める桜は来週には散っているのだと思うと切なく、だけど二人の父が身近に感じられて嬉しく、複雑な気持ちになります。

